

# 令和元年度薬物乱用防止教室講習会

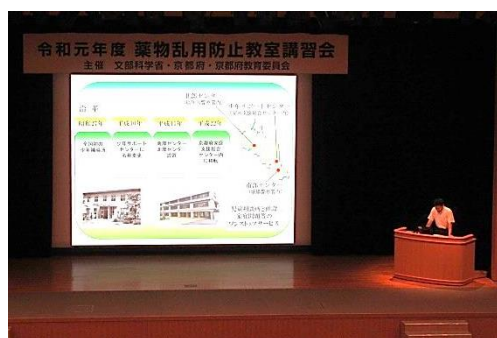
薬物乱用防止教室の一層の充実及び効果的な指導方法を学ぶことを目的に、薬物乱用防止教室講習会を開催しました。当日は、警察職員・学校医・学校歯科医・学校薬剤師・保健所職員・薬物乱用防止指導員等、薬物乱用防止教室の講師及び講師予定者と保健担当者・生徒指導担当者等の学校関係者、約 550 名の参加がありました。

指導員と学校関係者が共通理解を深め、今後の薬物乱用防止教室の進め方や相互の連携について考える機会になりました。

- 1 主催 文部科学省 京都府 京都府教育委員会
- 2 日時 令和年 9 月 26 日（木）13:00～16:40
- 3 会場 京都テルサホール
- 4 対象者 警察職員・学校医・学校歯科医・学校薬剤師・保健所職員・薬物乱用防止指導員等の薬物乱用防止教室講師及び講師予定者、学校関係者、薬物乱用防止教育担当指導主事等
- 5 内容
  - (1) 説明 I 「薬物乱用防止教室の現状と実施」 京都府教育庁指導部保健体育課
  - (2) 説明 II 「薬物乱用防止教室の取組について」 京都府健康福祉部薬務課
  - (3) 講演 I 「少年の薬物乱用の現状」  
京都府警察本部生活安全部少年課少年サポートセンター  
京都府教育庁指導部学校教育課指導主事併任 所長補佐 家村 隆宏 氏

少年サポートセンターの設立の歴史から活動内容についての説明がありました。

また、中学生を対象に実施したアンケート結果や京都府の薬物情勢から、身近な人(友達・先輩等)から誘われることが多いため、しっかりと断れる実践力を身に付けさせることを薬物乱用防止教室で教えていくことが必要であることを示していただきました。



(4) 講演 II 「人を信じられない病～信頼障害としての依存症と薬物乱用防止教育～」

地方独立行政法人 神奈川県立病院機構

神奈川県立 精神医療センター 医療局長 小林 桜児 氏

はじめに「なぜ薬物を始めるのか、なぜやめられないのか」という話では、脳の病気だと言われている依存症が、自助グループの集まりだけや、解放病棟で止めることができている状況をお話いただきました。

さらに、薬物乱用の危険性が高い子どもの条件として「心理的孤立(心理的虐待・機能不全家族・貧困)」等の環境要因が大きく、逆境体験が多いほど人への不信感が強くなります。その結果「人」に頼らず「物」に頼ることになり、薬物が泳ぎ方を知らずに溺れかかっている人にとっての浮き輪となってしまいます。

また、依存症は反社会的な子どもが陥りやすいとは限らず、過剰適応傾向の子どもも生きづらさを抱えているため、感情や思いを表出できないことによる依存症の危険性がひそんでいます。

このような状況から、これからの薬物乱用防止教育は、「ダメ・絶対」だけではなく、泳げないで溺れかかっている人に泳ぎ方を教えるように、受容と共感とハームリダクション(害を減らす)の対応が必要となります。そして、表面的な回復ではなく、根本の生きづらさを人に話すことで、信頼関係を構築していくことが重要となるという話をいただきました。周りの者の関わり方や声のかけ方、物でなく人との「つながり」について考える機会になりました。

